

完訳 異志斎聊

蒲松齡 柴田天馬訳



庫 文 川 角

第三卷 異志齋 全四冊

昭和四十四年八月二十日 改版初版發行
昭和四十五年一月三十日 改版再版發行

定価は、帯・カバー
に明記してあります

訳者

柴田 天馬

発行者

角川 源義

印刷者

中内 佐光

東京都文京区大塚六ノ二ノ五

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
郵便一〇二 電話東京一九五二〇八

株式会社 角川書店

電話東京(265)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

本製問・刷印曉

完 訳

聊 齋 志 異

第 三 卷

蒲 松 齡
柴 田 天 馬 訳



角 川 文 庫

994

目次

陸判 錢卜巫 夏雪 金姑夫 廟鬼 丐僧 俠女 咬鬼 泥書生 種梨 紉鍼 橘樹 放蝶 嬰寧

四 六 六 七 七 七 七 五 四 三 三 三 五

鄱陽神 山市 褚生 濰水狐 寶氏 巧娘 夢別 蟄竜 王成 彭二掙 李司鑑 大男 画馬 鏡聽 八大王 浙東生

二七 二七 一五 一三 一五 一五 一四 一三 一八 一五 二〇 二三 一九 二〇 九 六

一員官
 黃英
 捉狐射鬼
 霍生
 張誠
 折獄
 折獄二
 狐妾
 商三官
 耳中人
 宅妖
 耿十八
 造畜
 董生
 曹操冢
 閻羅

一七
 一八
 一九
 二〇
 二一
 二五
 三〇
 三八
 三五
 三七
 二四〇
 二四
 二四
 二八
 二五
 二七

四十千

錦瑟

快刀

沂水秀才

五穀大夫

雲翠仙

張貢士

褚遂良

乩仙

雹神

雹神二

促織

禽俠

呂無病

陝右某公

張鴻漸

二五

二六〇

二七四

二七七

二七八

二七九

二八九

二九一

二九七

二九九

三〇三

三〇六

三一五

三八

三三四

三六

頭滾
 武技
 車夫
 衢州三怪
 鳳仙
 庫官
 尸變
 竜肉
 酒狂
 負尸
 張老相公
 某甲
 宦娘
 豢蛇
 汾州狐
 長亭

三五一
 三五三
 三五九
 三六〇
 三六一
 三七六
 三七八
 三八三
 三八四
 三八四
 三九四
 三九六
 三九八
 三九九
 四〇九
 四二二
 四二四

采薇翁	石清虛	龍三	龍二	龍	阿英	龍戲蛛	楊疤眼	田子成	三朝元老	拆樓人	岳神	惠芳	地震	斂石	大蝸
-----	-----	----	----	---	----	-----	-----	-----	------	-----	----	----	----	----	----

四七四	四六八	四六七	四六五	四六四	四五二	四五一	四五〇	四四三	四四〇	四三九	四三八	四三三	四三〇	四二九	四二八
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

狐女	司文郎	老竜船戸	查牙山洞	邢子儀	紅毛氈	菱角	羅祖	真定女	于去惡	古瓶	顛道人	某乙	木雕美人	番僧	鷹虎神
----	-----	------	------	-----	-----	----	----	-----	-----	----	-----	----	------	----	-----

五五〇	五三四	五三一	五二五	五二〇	五一九	五二三	五一〇	五〇九	四九五	四九二	四八九	四八三	四八二	四八〇	四七八
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

韓方

雉鵠

蔣太史

霍女

海公子

諸城某甲

酒虫

姬生

周生

周克昌

泥鬼

水莽草

長清僧

陽武侯

陸押官

冷生

五五三

五五七

五六〇

五六二

五七六

五七九

五八一

五八五

五九〇

五九三

五九六

五九八

六〇五

六二〇

六二四

六二九

劉夫人 雨 錢 庫將軍 孝子 花神

さしえ 井上 洋介

三三 三三 三三 三三 三三

完
訳

聊齋志異

第三卷

嬰 寧

王子服は菖の羅店の人だった。早く父をうしなつて孤になつたのだが、大そうりこうで、十四のとき泮に入つた。母は、ひどく、かわいがつて、常々は遊郊野などもさせず、蕭氏をもらつて配偶せるつもりであつたのが、未嫁まえに若死にをしたので、求鳳が、まだ、すまずにいた。

上元の節句である。舅氏子の呉が迎えに来て、いっしょに散歩をしたが、村はずれまで来ると、叔父の家の僕が呉を呼びに来て連れて行つた。王は遊女が雲のようにいるのを見て、興に乗じて、一人で遊び歩くのであつた。

婢をつれ、一枝の梅花を、ひねくりながら歩いている娘がいた。絶代なきりょうで、笑うようすが、手にも掬まれるようである。王は、じつと見つめて、しまいには、変に思われるのさえ忘れていた。女は幾足か過てから、腰元を見かえつて、

「このひとの目は灼々して賊みたいね」

と言つて、花を地上に遺て、笑いながら行つてしまつた。王は急いで花を拾つたが、がっかりして、気がぬけたようになり、わびしく帰つてきたのである。

家につくと、王は花を枕の底にしまい、頭を垂れて睡たまま、話もしないし食べもしないのだ。母は心配して醺釀をさせるけれども、ますますひどくなるばかりで、すっかり、やせ、医師が診察